

法然門下の関東武士——熊谷蓮生の「夢の記」を中心に——

小此木輝之

『西方指南抄』に「おおご・しのや・つのと、この三人は聖人根本の弟子なり」（昭法全五〇七）と記されているように、大胡（実秀）・渋谷（道遍）・津戸（為守）は法然の古くからの門弟であった。彼らを含め、法然面受の関東武士を入門順に示す。

①熊谷直実 * 建久四年（一一九三）入門

・元久元年……又こくらくニ、所くわんニしたかんてうまるとの給へる事を、よことニけんさいニみをかみて、ことしハ十一年ニ、（『熊谷蓮生自筆誓願文』）

↓元久元年（一二〇四）から十一年前は建久四年（一一九三）

②大胡実秀 * 建久六年（一一九五）ころ入門

・上野ノクニノ住人、オホコノ太郎ト申モノ、京ヘマカリノホリタルツイテニ、（『西方指南抄』）

③渋谷（石川）道遍 * 建久六年（一一九五）ころ入門

・彼が大胡実秀の父隆義の便りを取り次いだとする『四十八巻伝』の説は無理。『決答授手印疑問鈔并縁起』の「生年二十五の時出家して……幼少の時、弥（いよいよ）蓮生の念仏せるを聞きて」とする熊谷直実と同年（建

久四年）出家説も不合理。

・『西方指南抄』『オホコ・シノヤ・ツノト』の記述から津戸為守、大胡実秀と同じころの出家であろう。

④津戸為守 *建久六年（一一九五）入門

・建久六年（一一九五）二月、東大寺供養の為に、幕下上洛の事ありき。^{（頼朝）}為守生年三十三にて供奉したりけるが、三月四日入洛し、同二十一日上人の庵室に参りて……。『四十八巻伝』

⑤蘭田成家 *正治二年（一二〇〇）入門

・蘭田の太郎成家ハ……正治二年の秋、大番勤仕のために上洛の時そのとしの十月十一日、生年廿八歳にて出家す……常随給仕六ヶ年……小倉の上人とそ申ける。『四十八巻伝』

⑤甘糟太郎忠綱 *建仁三年（一二〇三）以前の入門

・建久三年（實際は建仁三年「一二〇三」）比叡山の堂衆を鎮庄のとき、高声念仏して往生をとげたという。同郷の弥次郎入道も法然上人の消息を秘藏して念仏に励んだ。『四十八巻伝』

⑥桑原左衛門 *不明（甘粕と同じ頃の入門か）

・法然上人に帰依し、京都の祇園の北に草庵をむすび、口称の念仏に専心した。

⑦伊豆山源延 *元久元年（一二〇四）以前の入門

・この一条は、元久元年二月十七日、上人（法然）伊豆山源延のために集めるところ也。『浄土宗略要文』奥書

⑧東（千葉）胤頼 *元久元年（一二〇四）ころ入門

・（西仙房心寂の）妹の尼公……つるに元久元年の冬、臨終正念にして……念仏のこゑにていきたえぬ。……大番の武士千葉の六郎大夫胤頼これを見て、たちまちに発心出家す。上人給仕の弟子、法阿弥陀仏これなり。『四

十八卷伝』

⑨大江季光（毛利西阿） *承久三年（一二三二）以前、一二〇〇年頃入門

・西阿は専修念仏者なり。諸衆を勧請し、一仏浄土の因を欣んがため、法事讃を行じて廻向す。承久三年（一二三二）出家。（『吾妻鏡』）

⑩宇都宮頼綱 *承元二年（一二〇八）の入門

・承元二年（一二〇八）十一月八日、上人の勝尾の草庵にたづね参じて、念仏往生の法門御教訓をかうふる……一向専念の外、他事なかりき（『四十八卷伝』）。

・上人御往生の後……善患上人の見参に入て上人御往生の後も……（『九卷伝』）

⑪天野四郎 *不明

○

関東武士の法然面受の契機は、京都大番役（藺田氏・東氏）や東大寺大仏供養の扈從（津戸氏）などが多かった。それ以外にも宇都宮氏のように京都に居宅を構え、貴族（冷泉家）と姻戚関係にあったような在京武士も存在した。入信の理由は、『四十八卷伝』に「仮令、軍陣に戦い、命を失うとも、念仏せば、本願に乗じ、来迎に与らむ事、努々疑うべからず」（甘糟氏）と説き、「射獵を事として、罪惡を恣にす。上人、罪惡生死の凡夫、弥陀の本願に乗じて極樂に往生する」（藺田氏）と述べ、また「罪の輕重を言わず、唯、念仏だにも申せば往生するなり。別の様なしと宣う」（熊谷氏）と率直に話した法然の対応にあった。勿論、その前に命に関わる武士の勤めについての反省の思いがあった。加えて彼らを法然面受まで駆り立てた背景には、法華止観と念仏三昧を説いた関東天台宗の教えがあった。その地域に育ち、やがて確執を招く嘉祿以降の法難の理由もそこに存在していた。なお、院政に倣う

ような武士の出家（形式的に隠居し、家督の実権を保持した）は、幕府にとって「奉公」回避の手段とも認識され、若くして許可を得ない出家は次第に禁止されるようになった。

法然門下の関東武士についての著書は、梶村昇氏『熊谷直実』・『宇都宮一族』・『津戸三郎為守』⁽¹⁾があり、『勢観房源智』や『禅勝房』等も著述している⁽²⁾。また菊地勇次郎氏は、関東武士に限らず源智・静遍・明禅・宗源・源延・禅勝房等の法然門下をとりあげた。小此木輝之は、大胡氏・宇都宮氏・熊谷直実・津戸為守・蘭田成家等について考証し、その後、大胡実秀・蘭田成家・熊谷直実・津戸為守・宇都宮頼綱・毛利西阿・渋谷道遍・三浦氏・千葉氏・桑原左衛門入道・甘糟忠綱・弥次郎入道・北条朝直・諏訪盛重等について考察した⁽⁵⁾。本来はこれ以外にも紹介すべき著書も多数あり、またその内容も紹介すべきであるが、省略したい。また研究史として紹介すべき多くの論文もあるが、全て紙幅の関係で割愛する。関東武士に限ることではないが、宗史研究の基本姿勢としては、まず『四十八巻伝』、『九巻伝』等に記載された宗内史料をおさえ、次いで記載内容が一般史料や他宗伝承史料と比較し、確認する作業が宗史の客観性を求める手がかりとなる。また、宗内史料に引用された記録や文書が一般史料にも存在すれば、その内容の比較検討が重要である。あるいは、現物史料（記録や消息）が残存していれば、その内容が最も尊重されるべきである。その趣旨で執筆の規定に沿わないが、これまで公開されなかった熊谷直実にかかる「夢の記」の原史料について以下に紹介しておきたい。

○

『四十八巻伝』（二十七巻）に収載される熊谷蓮生の「夢の記」は、上品上生だけをひたすら願った彼の心情が端的に表現されている。しかし、人口に膾炙するこの「夢の記」の底本が嵯峨清凉寺にあることは殆ど知られていないし、その書誌的研究は全くなされていない。結論から示せば、同寺所蔵の『熊谷直実自筆誓願文』（卷子装 現題

簽「誓願狀」の末尾の一部からそれが構成されているのである。先ずは対校のため、左の上段に『四十八巻伝』の当該部分を掲げ、下段に筆者が翻刻した『誓願文』を示す。

又極楽に所願に随て

生るとの給へり。(以下十四行挿入 一行削除)

下八品の往生、われすて、しかもねがはず。かの国土にいたりをはりて、すなはちかへり来事あたはざればなり、かさねてこふ我願にをいて、或は信じ或は信ぜざらんもの、ねがはくは信と謗とを因として、みなさまに浄土にむまるべし。

于時元久元年五月十三日午時に偈の文をむすびて、蓮生いま願をおこす。熊谷の入道は六十七なり、京の鳥羽にて、上品上生の迎への曼陀羅の御前にてこれをおく。已上取詮。又和字の偈の文を、隆寛律師漢字にかきなされける。

下八品往生 我捨而不願

致彼国土已 即不能還来

重乞於我願 或信或不信

62 (悟)をさとる、「又こくらくニそぐわんニしたがんで(極楽)(所願)(生)うまるとの給へ」る事を、よことにけんさいニ(夜ごと)(現在)

64 (御拜)みをかみて、(今年)ことし八十一年二なる、又うた(疑)

願信謗為因 皆当生浄土

又蓮生自筆の夢の記云、

(65に続く) 上品上生にむまるべしといふ夢

(文欠) たびたび見たり。そばの人もみて告たり。

(文欠) 善導は夢を見てさととりて、觀經

の疏は作給へり。恵心又往生要集二、

夢を見て記し給へり。又珍海決定

往生集、夢を見て記し給へり。(文欠)

法華經に、四安樂の行者の、夢の中の八相を記したま

へり。

しかるに、れんせい五月十三日に此願を發て、

同二十二日の夜、阿弥陀仏に申さく、

(文欠) 蓮生がおこして候願成就

すべくば、疑まじからん御示現たべ、

又叶まじくば叶まじと示現

たべ、となださまにも、うたがふまじからん

示現たべ(文欠)と申てねたるその夜、すな

はち夢に見る様、金色の蓮の

- 79 かハす、「上品上生ニうまるへしといふゆめ、
(自ラカ) (度々) (側) (夢)
- 78 みから二たひくみたり、そハの人もみてつけたり、
(度々) (側) (悟) (觀經)
- 77 それ二、せんたうゆめをみてさととて、くわきやう
(善導) (夢) (悟) (觀經)
- 76 のそハつくり給へり、ふしん又往生えうしう二
(疏) (恵心) (要集)
- 75 ゆめをみてきし給へり、又ちんかいくゑち、やう
(夢) (記) (珍海東寺) (決定)
- 74 往生のす二、ゆめをみてきし給へり、○ しかる二
(集) (夢) (記) (法華經) (四安樂) (行者) (夢)
- 73 ほけ、やう二、しあんらくのきやうさのゆめの中
(法華經) (四安樂) (行者) (夢)
- 72 の八さうきし給へり、
(相) (記)
- 71 れんせい、五月十三日ニこのくわんをこして、
(蓮生) (願) (發)
- 70 おなしき廿二日のよ、あみたほとけ二まうさく、
(同) (夜) (阿弥陀仏) (申)
- 73 ふしなから蓮生かをこして候くわん上す
(伏しながら) (發) (願) (成就)
- 74 すへくハ、うたかふましからん、御しんけん事、
(疑) (疑) (示現)
- 75 又かなふましくハかなふまし、としんけん
(叶) (叶) (示現)
- 76 又かなふましくハかなふまし、としんけん
(給へ) (何方様) (疑)
- 77 たへ、とかたさまにも、うたかふましからん御
(示現) (給へ) (疑)
- 78 しんけんたふへく候、と申てねたる、そのすな
(示現) (給へ) (疑)
- 79 はちゆめにみるやう、こんしきのハちすの
(夢) (様) (金色) (蓮)

花のくきはながくて、枝もなくてそろく

としてたゞ一本立たるに、そのめぐりに、

人十人ばかり居まいりであるに、蓮生

申事ぞ、こと人は一人もあれが上には、

のぼりえじ、蓮生一人は、一定のぼる

べきなりといひはつれば、いかにしてのぼりたり、

とおぼえずして、その蓮の花の上に

のぼりて、端座して居たりと見はつれば、夢

さめおはりぬ。又願おこす。この願

まことなるべくば、臨終にゆゝし

からん人々耳目おどろくばかりの

瑞相をまつ現じて、もうくの人

弥陀の本願、見うらやませ給へとおこしたり。

故に上品上生の往生、いよく疑なきなり。

(文欠)

又同年六月廿三日の夢、同じ心なり。已上取詮

80 花の、くきハなかくて、えたもなくて、そろく

81 として、たゞいんほんたちたる二、そのめぐり二

82 人十人ばかりゐまはりである二、れんせい

83 申すことぞ、こと人ハ一人もあれかうえ二ハ

84 のほりえし、蓮生一人ハ、いちやうのぼる

85 へきなりとゆいはつれハ、いかにしてのほりけり

86 とんおほへすして、そのはちすのはなのうゑに

87 のほりて、たんさしてあたりとみハつれハ、ゆめ

88 さめ了、又くわんをこす、このくわん

89 ま事なるへくは、りんしう二ゆゝし

90 からん人々、しほくをとろくはかりの

91 ずいさうを、まつけんして、もうくの人二

92 みたのほんくわん、みうらやませ給へとをこしたり、

「かるかゆへに上品上生の往生いよくうたかひなき也、」

「そのうちこのゆめハみたる也、」

同年六月廿三日のゆめをなし、

蓮生自筆の發願の文、夢記等は、みな和字なりといへ

□□れにくしたり□□

ども、よみにくきによりて、少々漢字になす。

まず『四十八卷伝』編纂材料の原本が残っていること自体が貴重で、小論執筆の主眼もそこにある。『四十八卷伝』において「蓮生自筆の夢の記」とか、「蓮生自筆の發願の文、夢記等」と表現し、あたかも「夢の記」が独立した記録のごとく表現し、また編集している。しかし、正しくは右の下端に示した『誓願文』（以下、単に「底本」とする）の後半部分（翻刻にあたり、「底本」には本文の行頭から番号を付したが、その65行目から92行目）を摘録したことは一目瞭然である。それに、料紙奥の紙背文の一部も加えて、「夢の記」として編集したものといえる。

内容は、上品上生に往生する夢を蓮生はこれまでも度々見ていること。その功德について善導は夢の告げで『観経疏』を執筆し、恵心源信は夢みて『往生要集』を作成し、珍海は『決定往生集』を記し、また法華経の事例等もあげている。当否はともかく、蓮生において夢見と願成就は相即するものとして強く認識されていた。ついで蓮生は、元久元年（二〇四）の五月十三日に發願し、二十二日までひたすら阿弥陀仏に願った。その夜、茎の長い金色の蓮の花の周りに十人ばかりの人が集まり、蓮生だけが登り得て端座できた夢をみた。醒めてなお、臨終の時には弥陀の本願により人々がうらやむ程の瑞相が現れるようにと念願した。夢見が強ければ鞏固な確信となる。こうして、蓮生は上品上生の往生を確信するに至ったというのが「夢の記」の概要である。

以下、両本の異同（上段に太字で示した箇所）を少し解説したい。まず『四十八卷伝』は、「底本」62、63行の一部を引用するが、それに続く「下八品の往生わすれて……」以下の14行は出典不明である。少なくとも「底本」には存在しない。ここには、蓮生の上品上生の願や「元久元年五月十三日午時に偈の文をむすびて、蓮生いま願をお

こす。熊谷の入道は六十七なり」などとある。また、蓮生は発願の偈文を和語で書いたとするが、その偈文は現存しない。それを隆寛が漢語に改めたという偈文を収載している。「夢の記」導入文としての14行に及ぶ『四十八巻伝』の記述内容を全て創作もしくは脚色とは言い切れないが、少なくとも「底本」には見られず、この部分を確認できる現存史料は存在しない。

そして、「又蓮生自筆の夢の記云」として「底本」65行目からを引用し、「夢の記」として独立させた。なお、その前の64行目が削除されている点も注目すべきである。その内容は、「(極楽にうまる事)夜ごとに現在二御拝みて、今年は十一年二なる」(一部漢字に変換)という蓮生の浄土に帰入した年次を示す重要記事である。『四十八巻伝』編者はこの事実は無視して(少なくとも採用せず)「夢の記」を紹介する。このことは既に福田行慈氏が指摘していることなので詳細は割愛する(吉水入門後の熊谷直実について「大正大学大学院研究論集」七)。

さて、「夢の記」と「底本」の文字の異同を見る。削除(欠文)したところは66・67・70・74・78等の各行に見られるが、それらは「自ら」、「それに」等を削除して文章を整えたもので、72行目の「しかるに」を加えたり、77行目の「どかたさま」を「どなたさま」に代えているのは校訂の範囲と考えるべきであろう。

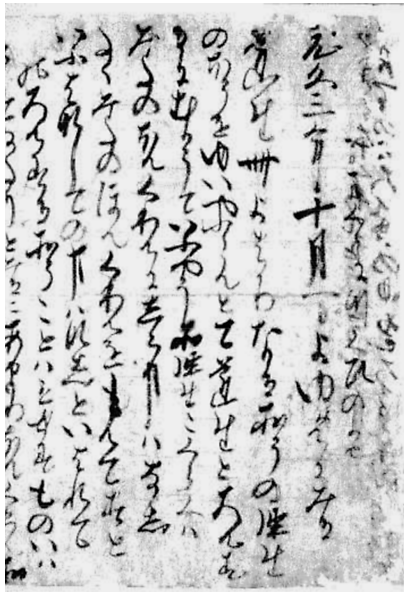
注目すべきは、「底本」は92行目までで完結しているが、料紙奥の紙背に「かるかゆへに上品上生の往生いよく疑ひなき也」「その後この夢ハみたる也、同年六月廿三日の夢同じ、□□れにくしたり□□」とある部分も一部収録している(傍線部分は収録せず)。現状の「底本」は、料紙が裏打ちされて紙背は判読しにくくなっているが、『四十八巻伝』編纂のころは確認できる状態にあったものと思われる。「底本」料紙の裏側の文字まで確認し、それらを丁寧に翻刻している点において、『四十八巻伝』編者の姿勢は大いに評価されるべきであろう。

なお、『四十八巻伝』は、末尾に「蓮生自筆の発願の文、夢記等は、みな和字なりといへども、よみにくきによ

りて少々漢字になす」とあるが、右に見たように蓮生の筆は元来、漢字かな交じり文であった。「和文」（仮名文字）だけではない。『四十八巻伝』の編者は仮名を漢字に改め、一部加筆・修正・削除した部分もあるが、文体を整え、「底本」の末尾を中心に「夢の記」として体裁を整えたことが判明した。

○

ところで、『熊谷直実自筆誓願文』には次のごとき文書が、少し間をあけて同じ卷子に装幀されている。つまり『誓願文』は二紙収録されているのである。これまで全く紹介されなかったことがないので、写真と翻刻文を示しておく。



- 〔端裏書〕（願）
 「ふくきたる本くわんを□□□□□□□□□□
 〔福来〕（御論義）（夢）
 十月一日のころんきのゆめ也、ろんにん□□□□□□□□□□
 〔鎌倉〕（着く日の夜）
 かまくらにつくひのよ也、
- 1 元久三年十月一日よ、ゆめにみる、
 2 蓮生、冊よはかりなるそうの往生
 3 〔法〕（言破）
 のほうをゆいやふらんとて、蓮生とろんす
 4 〔向〕（言）
 るに、むかうていふやうそ、往生こくらくハ、
 5 〔弥陀〕（本願）（如）
 みたのほんくわんにしく事ハなし、
 6 〔弥陀〕（本願）（以て）
 た、みたのほんくわんをもんですと
 7 〔言放〕（言葉）
 いふはなしての事ハなし、といはれて、
 8 〔心カ〕（論）（僧）（言葉）
 □のろんするそう、ことハもせず、ものいハ



- 25 すしてゐたりとみる二、あまりほんくわんそ
 24 と、ゆいつめられて、めをひしきて、みも
 23 (開) ひらかすして、うつふりふして、
 22 (有) あるとみるほに、たゝうせにうせて、人に
 21 (見) てもなうて、きえくゝとたゝうせうたる、
 20 (現に現に) (無) けにくゝとなくなるとみつ、ほかへゆきうす
 19 (見) るとハみえす、たゝきえうするとみえつる也、
 18 (夢) 又ゆめ二をなしよみる、これハさき二見えたり、
 17 (同) (夜見) 正月一日にてあるに、かんたいのかとニきて
 16 (居) (言) るていふやう、ふくのふくよし、とみのとみ
 15 (良) (参) よし、まいりて候、といふをきうて、れんせいか
 14 (言) いふやうをさめつくゝと三といふくゝとみつるなり、
 13 (言) そのつとめて十月二日きし了、
 12 これハまさしく
 11 (御懸) (示現) みたけの御しんけん也、
 10 (氏神) (御座) うちかみにてわします、
 蓮生 (花押)

この文書は、料紙袖の「端裏」に「福来たる本願を……」「十一月の御論議の夢也……」とあり、本文には、元久三年（一二〇六）十月一日（恐らく京都から鎌倉に着いた日）に見た夢を記している。内容は、四十余歳の僧の「往生の法」を蓮生が論破しようとしたところ、この僧は「往生極楽は弥陀の本願のみあつて言葉など無い」と言い、ひたすら黙した。そして（なお論争を挑んだ直実に）「余り本願ぞ」と折伏されてしまった。その上、目も見えなくなり、僧は人でないほど小さくなり消え失せた。

また、それより前に見た夢は、正月の門前に「福よし、富よし、参りました」という声を聞き、蓮生の言葉を「醒めた」（覚醒した）と三度繰り返していた。蓮生はこれを「御嶽の示現也、氏神にて御座します」と記している。東京都青梅市にある武蔵御嶽神社は、畠山氏をはじめ、中世における多くの武蔵国の武士に信仰された神社である。蓮生もこれを「氏神」として尊崇している。これらの二つのゆめを翌日に記したのがこの一紙である。

この一紙こそ、そのまま「夢の記」と言うべきものではないか。しかしながら、これは法然の教えを信じた蓮生伝としては内容に欠ける。『四十八巻伝』の編者はそれを承知で（あるいはこの一紙に示唆を得て）先の「夢の記」を作り上げたのではないか。言うまでもなく『四十八巻伝』は伝記を詳細に記してはいるが、随所に「詮を取る」とあるごとく、原典の史料を忠実に記録する必要はなかった。

最後に、この文書の課題を二つ指摘して論を終える。第一は、法然門下の関東武士では、同じ武蔵国にいた尊願（津戸為守）の神祇信仰などが有名であるが、蓮生も現世における氏神の加護を信じていた。中世武士団が「氏神」を中心とした地域血族集団であり、彼らの現世におけるあらゆる行動の源泉となっていたことは間違いない。勇猛な念仏者蓮生もその例外ではなかった。第二に、末尾の「蓮生（花押）」である。蓮生自署と花押は、「謨状」（建久二年「熊谷正雄氏所蔵文書」）にも見られる。詳細な検討は割愛するが、私見では蓮生関係の現存史料としてこれ

が最も自然な自署と花押と思える。その意味で、熊谷直実（蓮生）研究の最も貴重な史料といふべきであろう。

*小論執筆において、史料調査・撮影等は清涼寺住職鵜飼光昌師にご許可いただいた。御礼を申し上げます。

註

(1) 梶村 昇『熊谷直実』法然上人をめぐる関東武者1 知恩院浄土宗学研究所

梶村 昇『宇都宮一族』法然上人をめぐる関東武者2 知恩院浄土宗学研究所

梶村 昇『津戸三郎為守』法然上人をめぐる関東武者3 知恩院浄土宗学研究所

(2) 梶村 昇『勢観房源智』念仏に生きた人1

梶村 昇『禅勝房』念仏に生きた人2

(3) 菊地勇次郎『源空とその門下』法蔵館

(4) 小此木輝之『中世寺院と関東武士』青史出版

(5) 小此木輝之『法然門下の関東武士』『宗報』一一四三〜一一六六

キーワード 法然門下武士、熊谷蓮生、清涼寺蔵誓願文、蓮生夢の記